若山牧水と読書

吉岡　義信

はじめに

『司書課程年報』の 9 号(2006)、11 号(2008)、12 号(2009)に「若山牧水の日記に見る読書記録」と題して拙稿を掲載した。ここでは主に日記以外の記録による読書について見てみたいと思う。併せて、自然主義歌人といわれている牧水の読書による影響についても触れられればと思っている。なお、文中引用した文章の中で特別に指示したもの以外は、『若山牧水全集』（増進会出版社　1992.10―1993.12）によるものである。また引用文の漢字や仮名遣いは可能な限り原文に忠実に表現した。

幼少期における読書

牧水は幼少期、中学校時代のことを『比叡と熊野』、『姉の讀む物語から』など随筆その他に書き記している。(1)以下これらの中から読書に関するものを選んで少しまとめてみることにする。

牧水の祖父は川越の出身で、幼少より江戸に出て生薬屋で奉公していたが、長崎でシーボルトに仕えて長年医学を学び、種痘の普及に努めるなど、当時としてはかなり先進的な医者であり、一方で文字を愛し、家の二階には大きな書籍箱が十数個あり、それには漢籍や蘭語の書籍が満たされていたとある。

また、二番目の姉について、悧発で幼い時から文字に親しみ、学校のものは言うまでもなく、家にある旧い稗史小説や漢籍類まで取り出して読んで暗記し、牧水の子守をしながら「小栗判官」や「白縫姫」などをいい節まわしで物語って聴かしたそうで、牧水は子供心にも言い様のない哀愁を覚えた事があり、自分が読書を好むようになったのは、この姉の影響であろうと言っている。そして、この姉から仮名を教わり小学校に就学する前から解りもしない書物などを拾い読みしていた。

また、子供のころ、ある叔父の息子から「幼年雑誌」「少國民」などといった雑誌があることを知り、それからそれに噛りついて読むようになり、さらに住職をしていた別の叔父が持って来る絵入郵便報知新聞に載っている村井弦齋作「朝日桜」で、初めて小説というものを読み、振仮名を拾って駒雄静子（？）の恋物語に胸を躍らせて読み耽ったとある。

また、「武蔵野」(2)では、「太平記うち開いて新田義貞勢揃への條を聲高らかに讀みあげながら、如何にその野の廣さ雄々しさを慕つたであらう。むかし男ありけり、人のむすめをぬすみてむさし野へゐて行くほどに（中略）の物語讀みながらいかにその優しさ美しさを偲んだであらう」と幼少期の回想として、『太平記』を読み武蔵野の広大さを慕い、『伊勢

物語』(3)を読み武蔵野の優しさ美しさを偲んだとある。

日向の山奥の坪谷という所に生まれ育った牧水にとって、当時としてはかなり恵まれた読書環境にあったのではないだろうか。

延岡中学校時代の読書

牧水が歌というものに初めて接したのが中学で、その影響を受けたのが校長の山崎庚午太郎である。彼は和歌や国文学に造詣が深く、中でも香川景樹の『桂園一枝』や西行法師の『山家集』などを愛読しており、中学の「交友會雑誌」に桂園一枝註釋や西行伝、自作の歌などを掲載していた。

牧水は交友會雑誌の編輯をしており、この校長に大変可愛がられたようで、「今のお前には西行はむつかしいから先づこれを讀めと云つて貸して呉たのが景樹の『桂園一枝』であつた。夢中になつて二三度繰返した後で、また貸して貰つたのが西行の『山家集』であつた。よくは解らぬながらに耽讀して、後には殆ど暗記してゐた。」(4)とある。

「そして歌ばかりでなく色々の文學書類を讀み始めた。『一葉全集』は寄宿舎の押込に體をのしこんで豆らんぷの明りで讀んでゐた。すると或時舎監に見附けられて、その本を風呂場で焼かれてしまつた。けれども、讀まないでゐることが出來ないで、新に一本を買つて來て、今度は學校の近くの稲荷さんの祠のところへ行つて讀んだ。歸る時にはその本を砂の中へ埋めて置いた。次の日、それを又取出しては讀んだのであつた」(5)とも記している。また、「中学二年級の終りの頃からででもあつたらう、嚴格を極めてゐた寄宿舎内の自分の机の抽斗(ひきだし)の奥には、歌集「みだれ髪」がかいひそみ、縁の下の乾いた土の中には他人の知らぬ「一葉全集」が埋められてあるやうになったのは。」(6)ともあり、『一葉全集』については埋められていた場所の記述こそ違うが、舎監に見つからないよう隠れて読んでいたようである。

牧水が中学４年の時、秋季修学旅行で熊本に行った時、弟分になるある人が『おぼろ舟』と『みだれ髪』と題した歌集を古本屋から求めて来て、『みだれ髪』の方は読んでも解らないので牧水にあげたとある。牧水は「丁寧に一字々々と讀んで見たが中々解らない。そのくせ何だか底に奇妙なものがある様で、幾度びも幾度びも教師にかくれて繰り擴げて見た。」(7)と記しており、この『みだれ髪』が先の記述にある机の引き出しにあったものと同一のものであったかもしれない。

ともかく牧水に影響を与えた山崎校長は３学年の４月に亡くなり、後任の校長は文芸物の読書を禁止したことにより、牧水は寮を出て自由に読書が出来るようになった。

また、中学時代のものとして『吉野拾遺を讀む』(8)と題した文章を書いているし、『野守日記』(9)には、「いつの間にか自分も昨夜讀んだ八犬傳中の一人となって信乃や現八と芳流閣の屋根で闘つてみたり（中略）・・・と思つたらふと眼がさめた。」と八犬伝を読んだことが記されている。

ちなみに日記に記された図書や雑誌については以下のものがある。

「理想之学生」、「墳墓」、「文藝界」、「夏虫」（文藝倶楽部）、「西東両洋歴史問答」、「蛍火、水の魔術」、「英大文典」、「動物学」、「和歌辞典」、「新声」、「海の日本」、「新小説」、「豊島嵐」、「思ひ出の記」（徳富蘆花）、「スケッチブック」（アービング）、「文学界」、「ゆく春」（薄田泣菫）、「一葉舟」（島崎藤村）、「地獄の花」（永井荷風）、「ハイネの詩」、「春潮」（新声の臨時増刊）、「うもれ木」（与謝野鉄幹）、「春若丸」（巌谷小波）、「黒潮」（徳富蘆花）、「噫無情のコセットの巻」、「奇々怪々」、「愛らしき妻」、「沙翁物語」（世界文学）、「青年文」、「十五少年」、「太陽小説」、「太平洋」、「露伴叢書」、「石巻庄右衛門」（川上眉山・国民新聞掲載）、「海底の宝庫」（水蔭・国民新聞掲載）、「姫小松」（中村春雨・文藝界掲載）、「すみだ川」（永井荷風・文芸界掲載）、「近松浄瑠璃」、「山比古」（雑誌）、「膝栗毛」

早稲田大学時代の読書

中学時代にだんだん文学熱が高まり、投書も始めた牧水であったが、家が医者であったため文学をすることは許されるはずもなく、卒業証書を握ると直ぐに小説家になる志望を抱いて上京し早稲田大学へ入学した。(10)

牧水は、「小生如き讀書狂には校内に圖書館のあるがいつち嬉しく候、見ぬ戀にあくがれし古く尊き書、新刊の小説類、参考書、其他雑誌新聞うづたかし。（中略）も一つ面白く思ふのは同趣味のものが集つてゐることにて、當時天下に一寸名のある文藝雑誌などにこの校の生徒の主部を占めてゐぬは稀に候」(11)と大学に図書館があることを非常に喜び、事実頻繁に利用している。また同趣味の者が集まっており、当時名のある文芸雑誌に早稲田の学生が名を連ねていることに驚きを隠せなかったようである。

まず学生時代の読書について、日記（明治 37 年）に記されている書名とその作者をあげてみると、以下のようになる。なお書名と作家についての解説は『司書課程年報』に記しているので参照されたい。

尾崎紅葉―『紅葉全集』、『金色夜叉』、『むき玉子』、『むらさき』、『換果編』、『浮木丸』
泉鏡花　―『湯島詣』、『柳小島』、『高野聖』、『風流線』、『通夜物語』
坪内逍遙―『当世書生気質』、『新曲浦島』
中村春雨―『くもり日』、『黒塗馬車』
広津柳浪―『河内屋』、『だんだら染』
村上浪六―『川上三吉』
菊池幽芳―『乳姉妹』、
北村透谷―『透谷全集』
川上眉山―『青春怨』
小杉天外―『相続人』
原抱一庵―『聖人か盗賊か』

徳富蘆花―『不如帰』
米光關月―『朝日和』
木下尚江―『火の柱』
田山花袋―『重右衛門の最後』
出口掬汀―『わかれ路』
一菜庵主人―『野分集』
G,H,Nettleton―『スペシメンス』
山川登美子、増田雅子、与謝野晶子―『恋衣』
十返舎一九―『東海道中膝栗毛』
『伊勢物語』
『勝いくさ』（雑誌『文芸倶楽部』の増刊号）
正岡子規―随筆

この中で紅葉の作品は一年を通して読んでおり、『金色夜叉』については二箇所「讀みて泣く」とあり、広津柳浪の『河内屋』についても「讀んで泣く」とある。川上眉山の『青春怨』では「讀んで頭を沈めき」と記されている。菊池幽芳の『乳姉妹』については「前編を讀みていたく興を惹けり、夕方、貸本屋より後編をかりしも、あの驕慢な君江が、罪悪に対する懲罰のあまりに寛なるが気に食わず、且つ又、気色すぐれざりしかば、熟讀もせず、又勉強もせず、怠けぬ、誠にかれ君江は金色夜叉の宮よりも、其犯せる罪、遙かに大にしてしかも、宮の美しき悔恨なく、醜骸に醜悪の心を抱いて、醜刃に仕る、憎みても尚ほ余りあり」と主人公君江を金色夜叉の宮と比較して批判しているが、読了後では「名だけの味は噛み出す能はざりしも、とにかくよきよみものなるべし」と記している

『和歌講話』(12)によると友人・土岐哀果の出版に際して書いた文章の中に、上京して最初に買い求めた本の中に『源氏物語湖月抄』と『萬葉集略解』とがあり、両方ともに大阪版の安っぽい帙入本であったが、本箱に置いて嬉しく眺めているだけで開いて読むということは少なかったとある。そのことを自身が怠け者のせいであり、またその当時、略解なり何なりが既に厄介過ぎていたとも言っている。そのうちに『源氏物語忍草』という本の存在を知りそれを読んで源氏を読破したような顔をするようになり、次いで神田の大學館から出版された千葉勝重編の袖珍本を見つけてからは、その袖珍本の萬葉を前後十年間あまり、それこそ何度繰返して読んだか知れず、表紙は破れ去り、その時々に歌の上つけておいた種々の符号で鉛筆やペンのあとだらけになっていると書いている。この袖珍本は『類題萬葉短歌全集』（明治 37 年刊）のことであり、この本と『唐詩選』（これはもっと小型のものであった）と獨歩の『武蔵野』の３冊は、当時、牧水の側から殆んど離れたことが無く、旅行に出る時など、その何れか若しくは全部かが必ず自分と共にあったと記している。

ちなみに、この３冊以外に牧水の常に身近にあった本として薄田泣菫の『ゆく春』をあげている。この本は泣菫から時任霧峯へさらに牧水の従兄へ贈られたという経緯があり、

牧水は従兄から強奪したと書いているが、「恐らく『ゆく春』ほど僕の愛讀した本はないだらう。いつしか一字一句を悉く暗記して、山に行き海に行く時など殆ど間斷なく僕の唇頭にその中のどの詩かゞ上つてゐた（中略）そして散歩や旅行に出る時など一度として缺かしたことはない。だから中國や紀州や色々な國々をこの本は旅行した」とある。(13)

万葉集の事については、同様の内容が『わが愛誦歌』(14)にも記されており、これには、「その後、萬葉集に似てゐるといふので、實朝の『金塊集』を讀んだ。これも嬉しかつた。白状すれば私が氣を入れて讀んだ古い歌集といへば先づこれらのものである。古今集や新古今集など、幾度か讀みには讀んだが、要するにただ讀んだゞけで、頭に残る殘つてゐる所は誠に少い。少いどころか、反感を抱かせられたのも少くなかつた。」と記されている。

また、同書には「東京に出ると共に私は盛んに自分で三十一文字を竝べ初めた。それも愛讀してゐた前の二書とは風の變つた所謂新派の歌であつた。そしてそれの面白くなると共に自然古い歌を讀むのが面白くなくなつて殆どどの歌書をも讀まなかつた」とある。

ここにある前の二書とは『桂園一枝』と『山家集』の事である。これらの古い歌を読むのが面白くなくなったとする新派の歌を知る契機について、『彼の一巻、この一巻』に翌春（明治 36 年）、耳川上流の田代という所に友人を訪ねて行った時、「机の上に『新派和歌評釋』といふ小さな本が載つて居る。何心なく讀み始めると、さア耐らないほど面白い。（中略）それに由つて私は當時の新派和歌といふものを漸く了解し得た様な氣がした」と記しており、平出修の『新派和歌評釋』に依るところのものであることがわかる。

さらに牧水は「余は近來多く佛教の書を讀むを喜ぶに至り候、未だ実際にはくはしく讀んで見ねど讀んで見たらとは毎に思ひ居り候、余の性格はヤ教よりも何となく佛教の方を喜ぶやうに思われ候」（明治 39 年 10 月 9 日　鈴木財三宛書簡）とあるように、この時期仏教書にも興味を持っていたことが窺える。

なお、牧水の歌における万葉集の影響については、田中教子氏の「牧水と万葉集」(15)に詳しい。

読書による国木田独歩の影響

早稲田へ入学した頃、牧水は「その頃獨歩や透谷のものを讀んだ。殊に獨歩の『武蔵野』は、一々古本を買つて來て友達に讀むやうに勸めたものである」(16)とあるように独歩、特に『武蔵野』に傾倒していたようである。この独歩の『武蔵野』については書簡にもたびたび出てくる。

あの夜の約束「武蔵野」をお送りする、夜涼秋の近きを覺えしむるとき静かに是を繙いて見たまへ、屹度或一種の印象が深く深く兄の胸裡に刻まるゝに相違ないだらう、實際「武蔵野」は秋に讀むのが最も適當して居る、空蒼く風幽かな秋の日、阿蘇の噴火口の前に立

つて覺ゆる蕭やかな感じが或はこの小册子の中に含まれてゐぬとも限らぬ、云うまでもないが、この獨歩の作物を、弦齋や浪六やまたは紅葉柳浪等の作物と同じやうな態度で讀んだら、それは大間違ひである、兄の好むといふ漱石の夫とも毛色を異にして居る、然し兄はよく斯般の情趣を解し得る人だと僕は視て居る、だから僕の最愛の食物この「武蔵野」をお貸し申すのだ、册中の二十篇とりどりに皆いゝ、二三幼稚の氣のあるのもあるが、それは見逃し給い、どれも皆静かに讀んで繰返して見給い、味はだんだん深くなる

（明治 40 年 8 月 25 日　百渓禄太郎宛書簡）

獨歩の作物を讀んで貰つたことに対して僕は先づ感謝します、獨歩のものはとりわけてもこの秋に讀むが適して居る、「むさし野」以外に何か讀みましたか、獨歩集、運命、濤聲、など單行本も沢山あります、本にならないでので、何かの雑誌に出た「都の友へ、B 生より」といふのがあつたが、これなどを讀んでいると、どうしてもこの秋の寂寥に耐へられないやうな感が萌して來ます　（明治 40 年 10 月 26 日　百渓禄太郎宛書簡）

獨歩集はいゝでせう、くりかへし讀んで下さい、他の人のと違って讀めばよむだけその底の深い味の出て來るものばかりです、そして石のやうに固く、水のやうに柔らかに、火のやうに熱く、氷のやうにひやゝかなそして永劫盡くる無き大自然の面影、こゝろもちを味つて下さい、私は獨歩先生に由つて僅かながらも「われ」といふものゝ存在を知らむと志し、「自然」といふものゝ消息をうかゞはむと思ひ立つを得たのです、私はそれを無情の幸福と存じてゐます、無情の悲惨なあはれな幸福だと存じてゐます、宇宙自然の確乎（現實）、宇宙自然の神秘、それらのことに思ひいたる時、かすかながらも私はわれと自然との面影に接し得るやうな心持がして、慄然とするのです、それがもう私にとつての唯一無上の幸福であり感謝であるのです、これらの感じの前に富貴栄華が何でせう、戀が何でせう、「獨歩集」だけでは不充分です、「武蔵野」「運命」「濤聲」など、これらを集めて熟讀して御らんなさい、確かに数部の教典を讀んだ以上の或物がそこに残ることと信じます、そして大自然の偉大なのに驚きたいといふ仲間の一人となつて下さい

（明治 42 年 5 月 22 日　石井貞子宛書簡）

このように、独歩の作品は読むほどに味わい深いものがあり、自分と自然とがいわば同一化するような気持ちになり、無上の幸福であると言っている。北原白秋は「同宿時代の牧水」(17)の中で「安成貞雄君も當時の吾々の仲間では一番の學者で、いつもツルゲーネフの小説などを懐に入れて歩いてゐた。若山君もツルゲーネフの影響を可なり受けてゐたやうに思ふ。それに若山君は獨歩に傾倒してゐて、よく獨歩の小説のことを聞かされたものだ。」と独歩に傾倒していたことを述懐している。

なお、石井貞子（本名テイ）は、牧水が新雑誌「新文学」発行の挫折や園田小枝子との恋愛問題に苦悩していた頃、友人の富田砕花の紹介で知り合った女性で、短歌や小説を投

稿しており、窪田空穂の「十月会」のメンバーでもあった。

この独歩作品による牧水への影響について、土岐善麿は「牧水論序説」(18)の中で次のように述べ、ワーズワースから独歩、牧水へと続く系列が、牧水の作品、性向、人生自然に対する態度を理解する上で極めて重要な契機をなすものであり、定説のようになっている明治末期の自然主義運動の中に生まれた歌人ということも、こうした系列による連関によるものであるとしている。

牧水は遂に醇乎たる歌人であつて、歌學者というべき素質はもたなかったが、彼の制作態度とその推移とは、歌集の序文によつてほぼうかがい得る。『渓谷集』以外すべての歌集に彼は相当長い序文を書いた。ここにそれらと、同じ時代の文壇的動向との關係をくわしく論考するいとまはないが、もつとも端的に斷定し得ることは、彼の生涯を通じて、その青春時代からもつとも愛讀した『武蔵野』『獨歩集』その他、国木田獨歩の作品ならびに感想に強く影響されていた事実、これを看過することはできない。（中略）ワーズワース・・・獨歩・・・牧水、この系列は、彼の作品ならびに性向、人生自然に対する態度を理解するに極めて重要な契機をなすものといわなければならない。早稲田時代からの交友をかへりみても、いかに彼が獨歩を敬慕していたかが思われる。牧水が獨歩の一作の出づるごとに反讀愛誦して、嘆賞惜かざるものがあつたことを追想すると、彼の戀愛、その事件と處理すらも、また彼の紀行文にあらわれる特殊な、あるいは平凡な人物とその描寫さえも、すべて獨歩の生活と文學にならい學ぶところの多かったことに思い到らずにはいられない。（中略）彼は明治末期の自然主義運動の中にうまれた歌人であったということがいちおう定説のようになっているが、それは文藝的にいうと、初期の理念に屬するワーズワース的な「自然詩人」なのであり、その点、まつたく獨歩的であつて、作品に宗教的、哲理的なところがあるとすれば、それもこうした連關によるものといえよう。

読書による田山花袋の影響

牧水は田山花袋の作品も読んでおり、獨歩同様かなり影響を受けているように思われる。資料としては少ないが、以下 2 通の書簡に花袋のことが載っている。

田山花袋の郊外、私も、非常に興おほく讀みました、古本にでもあつたらあれを一册お送りするつもりでしたがお讀みになってゐたとは嬉しかった

（明治 39 年 1 月 10 日　関貞蔵宛書簡）

然し例もと異つてこの冬はひそかに活動して見るつもりで居る、それも冬籠り相應の活動で、手あたり次第に讀んで見ようと思ふ、これまで自分はずゐぶん根氣よくいろいろなものを讀んできたが要するに夢中讀みで、あとに残してる所は零だ、で、今度はそれだけで

なく極めて注意深く一つ一つを味わつて見る決心でゐる、昨夜もその準備として神田の古本屋を三時間あまりも渉つて花袋の作物の掲げてある古雑誌を十册ばかり買って來た、延岡に居る頃から僕は花袋の作物が好きであつたが、いま考へてみてもどうしても彼は現今日本の小説界におけるオーソリチイであると信ずる、露伴紅葉柳浪等の一派は既に時(タイム)のために葬り去られた、イヤ最初から彼等は時代と時代とが相觸れて發したホンの一寸した閃光に過ぎなかつたのだ、そこに行くと花袋は偉い、よく時代精神を解し人生を解しそして忠實に自己の製作に從つて居る、彼は前世紀末あたりからのありとあらゆる著作を讀んで居るといふ、そして時々その讀んだものを消化して吾人に紹介して居る、近頃急(ニハ)かに世間に騒がれて來た藤村、獨歩の自然派といふも要するに花袋に由つて導かれたものである、二葉亭と竝んでツルゲネーフやゴーゴリー、モーパツサンなどの思想を日本に紹介したのも彼である、彼の作品は悉く虚でない實である、直ちにわれわれ人間に接着したものである、ハイカラに云えば人生そのものゝ声である、少なくとも明治の真の小説は漸く彼に由つて起つて來たと見ても差支へはあるまい。　（明治 39 年 12 月 2 日　鈴木財蔵宛書簡）

この中で牧水は中学時代から花袋の作品が好きであったと言っており、露伴、紅葉、柳浪といった一派はすでに時代遅れであり、時代の流れの中で一瞬の輝きにすぎなかったと評している。また、藤村や獨歩といった自然派と言われるものも花袋によって導かれたものであるとしている。とすると、牧水自身は自らを自然派とは思っていなかったのではないだろうか。

この牧水と花袋の関係について、小谷稔氏は「短歌の写生とその周辺（四）花袋・牧水と自然主義」(19)の中で、牧水が前田夕暮とともに自然主義歌人として括られていることに対する牧水門下である大悟法利雄氏の「極めて特殊な万葉調歌人だった」という論拠に同調できないとして、上記の手紙文を引用し、牧水は「花袋から自然主義的な見方の洗礼を受けていることは確かである。」としている。また、夕暮の作風が文壇自然主義の風潮を顕著に受け、やがて幾変転したような変化は牧水にはなく、その点で牧水は本質的に生の悲哀を抱きつつ生きた歌人であると分析している。

卒業後における読書

牧水は明治 41 年 7 月に早稲田大学を卒業している。卒業後の日記は断片的でしかも読書に関する記載はわずかである。以下、日記以外の記述から読書に関するものを拾い出してみることにする。

私はさつきから蘆花さんの「不如歸」を切りに思ひ出してゐます、アノソレ逗子の春の夜、卓の上に浪子が山桜の花を眺めて居る所がありませう、彼處ほど私を泣かす所はありません、いつでも心のうちにいや一な氣のきざした時には必ず、「不如歸」をとり出して讀むと

いふ癖をつけて居たくらゐでした、あなたはそこにお持ちではありませんか、ありましたら今度讀みませうか、久しく私も讀まない、今夜切りに讀みたい（中略）さつきから萬葉を讀んでゐますが、ようござんすねえ、まるで大空を悠々として雲のゆくやうな大きな豐かな詠みぶり、まつたく言語道斷です、讀んで居ますと今の世のこせこせした所から脱却して自分もその雲の列に入つたやうな氣がします、讀みながら今夜は夢に入りませう

（明治 42 年 2 月 5 日　石井貞子宛書簡）

富田君も僕もひどく沈みかけた、で、思ひ出して薄田さんの「ゆく春」を探し出して讀み始めました、僕自身には過去のあれこれの思ひ出もありますので、矢張り身にしみます、はかない夢のかなしみを味ふやうな趣きは「ゆく春」一巻に満ちてゐます、お讀みなさいませんか、おすゝめ申します　（明治 42 年 2 月 19 日　石井貞子宛書簡）

夕方讀みました唐詩選の中に次ぎのやうな句がありました、初めも終りももう忘れて、ただ右だけ記憶してゐます、（中略）「ゆく春」の中にも面白いのがありませう、

（明治 42 年 3 月 24 日　石井貞子宛書簡）

余は忽忙の裡に島崎藤村氏の『新片町より』を読んで近頃にない静かな心に立帰るを得た。『新片町より』は藤村氏の雑録集である。『破壊』や『春』や其他の短編等を藤村の表玄關であるとしたならば、是は裏口であり勝手元である、帽子もとらずことことと裏口の戸を叩いて木犀か何かの匂つて居る裏庭に通つて縁側に腰かけて主人藤村と四方山の話でもして居る様な氣持がこの一册を讀む時に胸一杯に滿ちて居る、打解けた氏の眞面目を充分に味ひ得ると思ふ　（『新片町より』を讀む　明治 42 年 10 月 12 日『中央新聞』）

明治 42 年は前述したように、雑誌発行の挫折や恋愛問題に苦悩していた時期であり、いつでも心のうちにいやーな気のきざした時には必ず読む癖をつけていた『不如帰』を今夜はしきりに読みたいとか、『万葉集』を読んでいると今の世のこせこせした所から脱却して自分も大空を悠々としてゆく雲の列に入ったような気がするとか、『ゆく春』を読むと過去のあれこれの思い出もあるので身にしみるとかあるように、この頃の牧水の心境が見えてくるようである。

本を買つて送つてくれませんか、古本にいゝのがあつたら尚ほ結構だと思ふのです、二册ほしい本があるのです、一はルーソーの「ざんげ録」です、たしか石川戯庵といふ人の譯であつたと思ひます、このごろの出版です、一つはニーチエの「ツアラトウストラ」、これは新潮社出版で生田長江の譯、（南北社は大變やすかつたが、いまでもさうですかしら）（中略）ニーチイエのは、ツアラトウストラ以外に、邦譯がありますから、これよりよりよきものがあつたら、それでもいゝ、御存じなら他のを知らして下さい、ベルグソンのは

まだ譯はありませんね、譯でなくとも、この人のことを書いた雜誌か何かあつたとおもひますが、氣はつきませんでしたか、「六合雜誌」か「人生と表現」か帝文かの九、十、十一月號のうちでした。或はオイツケンであつたかとも、思ひます、それでもいい、博文館の何とか記念出版のうちに、何とか叢書といふのがあるでせう、第一編にクープリンの「決闘」の出るのです、あの「決闘」はもう出ましたか知ら、出てゐるならそれも是非見たいと思ひます（中略）そして、その間に出來るだけ讀書したいと思ふのです、實にはげしいなまけ者であつたため、今まで何一つ讀まなかつたので、みな新鮮な氣持ちで讀めるだらうと思ひます、山おくの渓の上にのぞんだ窓は讀書には實にいいのです

（明治 45 年 11 月 25 日　原田実宛書簡）

しきりに本がよみたいのですけれど、買ふことが駄目なのです。で、この歌と新潮社發行の「死の勝利」とを、交換にしていただくことは出來ませんでせうか。（中略）若し、よろしかつたら、「毒の園」も讀みたいのです　（明治 45 年 12 月 11 日　金子雄太郎宛書簡）

人丸の歌を讀んでゐますと、年代を離れて、今のわれらの心をしつとりとうるほすたとへばかすみがかつた山の山のおくの寂しさのやうなものがあります、獨歩のいはゆるヒユーマニチイーがこれなのです、自分の歌と人丸の歌とを讀みくらべて、私は、この間の夜、いひがたい哀愁に襲われました、あゝいふ太古の詩人にくらべて、今のわれらの生命の、混亂と複雑とのあまりに烈しいのに思ひ及んで、一種云ひがたい涙をおぼえたのです、人丸の寂しさは、人類共有のさびしさです、ですから、それは今のわれらにも豐かに含まれてゐる、たゞ、それが、人丸のごとく、純粋であり得ないのです、ゆつくり讀んで、何か感想でも書いてみたいと思つてゐます　（大正 2 年 2 月 13 日　小倉暮笛宛書簡）

「死の勝利」ありがたうございました、何だか電氣にでもかけられてゐる様な痛さを感じながら讀みました。「毒のその」はまだ出來ないでせうか、また濟みませんが何か「鴨」か「サフオ」か「遊蕩兒」かを、おねだりするわけには參りますまいか、いづれでも構ひません。どうぞお聞届け下さいまし。讀書のほかに實際私の助かる法は、いま、無いのです　（大正 2 年 3 月 9 日　金子雄太郎宛書簡）

明治 45 年 5 月 5 日、太田喜志子と結婚するも父重態のため 7 日には帰郷、11 月に父死去、長男である牧水は郷里で就職するよう近親者に要請され苦悩しつつ、翌大正 2 年 4 月に長男が誕生し、意を決して上京、6 月妻子と共に暮らすようになる。

上記の書簡はちょうど郷里に戻り苦悩していた時期のものである。この頃はしきりに本が読みたく、読書のほかに今の自分が助かる法は無いとまで言っている。そして友人宛に本を送ってくれるよう依頼している。それがルソーの『懺悔録』（告白）、ニーチェの『ツ

ァラトゥストラ』やダンヌンツィオの小説『死の勝利』であり、「人麻呂の歌」（おそらくは万葉集）であった。また、ベルクソン（フランスの哲学者）、オイケン（ドイツの哲学者）の訳本、『毒の園』、『サフオ』、『遊蕩兒』、『鴨』といったものを要求している。(20)クプリーン（ロシアの小説家）の『決闘』については、下記にあるように帰郷中に鹿児島を訪れた帰りの船中で読んだことが記されており、「読みながらも書いてある以上のことにまで心が走り、却って困ってしまったが、こんなものを読むのは今の自分の苦悩を鮮明にする所以である」と言っている。

私にはこのごろいよいよ露西亞の新しい人のかいた小説が身にしみるやうになりました。ゴルキイの『夜の宿』（とツイ書きましたが、私の讀んだのは昇さんの譯した『どん底』の方でした）などが漸くわかるやうになりました。もっとも『どん底』を讀んだのは、二三年前の秋、三四ケ月信州に行ってゐたとき、小諸町の病院の二階で讀んだものでした。そのときには、殆ど無意識に五感を刺戟せられたやうな、解らないやうなもんでした。昨今、漸く彼の一篇に出て來る人たちの心持、それを描いた作者の心持に、意識的に同感するやうになつたと思ひます。（中略）そして近頃、鹿児島からの歸りみち、船の中で、クープリンの『決闘』を讀みました。これは、もう讀みながらも書いてある以上のことにまで心が走つて、却つて困つた位でしたが、こんなのを讀むことは、いよいよ目下の自分の苦悩を鮮明にする所以なのです。（「遠き日向の国より」大正２年）

大正２年に「創作」を復刊したが翌３年には休刊、６年に再び復刊、この間歌集や散文集などを出版していたが、妻喜志子の心労による病臥と療養のための転居、４年に長女の誕生、７年には次女も誕生したが、貧窮の生活が続いていた。

以下３通の書簡はこの時期のものであり、芭蕉の句やドストエフスキーの『白痴』を読んだことが記され、さらに翻訳ものを片っ端から読みたいとも言っている。また、大正５年に出版した『旅とふる郷』の中の「秋乱題」ではダーウインの『進化論』を読んでいたともある。

このころ、芭蕉の句をとりだして讀んでゐます、漸くこの人の深い心を窺ふことができそめたのかとも思はれます　（大正３年９月 10 日　高鹽背山宛書簡）

何か讀みたいと思はないか、僕は切りに讀みたい、飜譯ものゝ大きなのを片つぱしから讀んで行かうと考へてゐる、圖書館通ひだ。　（大正３年 10 月２日　小河原寛香宛書簡）

昨日は「白癡」を讀んで暮らしてしまつた、あれは元來何册の本なのだらう、僕は四册きり持つて來なかつたがもう一册位ゐあるにではないだらうか、若し殘つてゐたら何かと一緒に送つてくれ、どうもこのまゝでは少々變だ　（大正７年２月９日　若山喜志子宛書簡）

昨今私は進化論に關する書物を讀んで居る。二十二歳であつたダーウインが探検船ビーグル號に乗り組んで六年半といふものを世界の各所を經巡つたといふ様なことから、地球の歴史、生物の歴史、人類の歴史、更にまた世界各地に於ける動植物の分布などの事を讀むにつけ、此頃一層地圖を可懐しく思つてゐるのである

（『旅とふる郷』大正５年６月新潮社刊）

これ以降、読書に関する記述のものはほとんど見当たらない。わずかに「此頃は頭の工合も悪いため、讀書らしい讀書もせず、氣を入れてものを書くとか歌を作るとかいふこともしない」(21)とか、「讀書と、生活改善に就いてあれこれ考ふ」（昭和２年１月 26 日日記）、「読書と思索、この病氣を機會にわが朝夕を少し改め得ば幸なりとおもふ」（同年１月 27 日日記）と記されているのみである。

牧水の読書観

牧水の読書観といっても短歌作法上のことであるが、『短歌の鑑賞と作法』（昭和２年　単行本未収録文　全集第 13 巻）の中で、まず『万葉集』を挙げ、様々な注釈書の中で、土岐善麿の『作者別萬葉全集』と橘千蔭の『萬葉集略解』を勧め、現代作家の歌は自分の好みに近い流派作家のものを勧めている。また歌集以外の読書について、「よき歌はよき生命より生れる、或はよき生命よりのみ生れる」という観点から、自分の生命のための読書が必要であり、評論、小説、戯曲、その他長詩俳句等の詩歌類、全ての芸術、ひいては宗教哲学の書物等の優れたものは我らの生命に対して不断の糧を与えてくれるものであり、歌集に偏った読書はしないようにと言っている。

また読書法について、黙読より音読を、散文より韻文を、新しいものより古いものを勧め、万葉集、祝詞、聖書の詩篇、唐詩選、方丈記、外国語が堪能であればそれぞれの国語で書かれた大詩人の詩を挙げている。そして未明の神前に祝詞を誦するような緊張した、敬虔な心で音読すること、それは自分の声そのものが自然に自身に感興を呼ぶからであるとしている。

この点は、最近流行っている「声に出して読む云々」という音読のすすめにも共通するものがあると思う。もっとも牧水自身は自分でも体躯のわりに声が良かったと言っており、独特の韻律で歌を詠っていたとも伝えられている。

また、読書観については同様のことが「和歌講座」（単行本未収録文　全集第 10 巻）にも以下のように掲載されている。

ではさうして歌の本ばかり讀んで居ればよいかといふと決してさうではない。此處では専ら作歌に指を染める第一歩の方便としての讀書（主として歌を）を説いたのに過ぎぬ。眞

實の意味の讀書は決してそんなものではないのだ。前にも云つた通り我等が歌を詠むのは自分を知り自分に親しみ、更らに自分を守り育てて行かうとするためと云つてもいゝのであるが、その自分を知る—換言すれば人生を知るといふ上にこの讀書といふことがどれだけ役立つか解らないのである。書籍は多くの場合、それぞれの道の先輩が自ら苦しみ、自ら經驗し、自ら發明したところのものを書き記しておいたものである。我等はそれを讀むことによつて謂はば一足飛にその先輩の歩いて行つた境地まで到達し得ないまでもそれによつて啓發せらるゝところは少なくないのである。人生を知るための讀書といへば可なり範圍が廣くなつて來る。前に云つた詩歌類から小説、戯曲、評論其他の純藝術的作品は云ふまでもなく、其他宗教哲學の本にまでも及ぶべきであるのである。

これまで見てきたように牧水自身は実に多様な本を読んでおり、こうした読書観あるいは読書法といったものは、彼自身の経験から生まれたものであるといっても過言ではないだろう。また、以下の書簡にもあるように実際に勧めてもいる。

お手紙に對してお答へするためには、そうしたむつかしいことでなく、極く平易に、私は貴兄に讀書なさいとお勸めします、小説、評論、戯曲、そんなものの極くいゝもの（といつても茫漠としてゐませうが、まアいゝものと世もひとも認めて居るものとしておきませう）を極眞摯な、初めて文字を知つた人のやうな心持で御熟讀なすつたら、自づと右の問題に對して、といふより在來貴兄の歩いておゐでたみちに向かつて御自身批評の出來る地位にたゝれるだらうと存じます（中略）歌歌と云つても我らのいふ歌は、單に歌だけ讀んで居ればいゝといふわけに行かないのです、そして、この場合貴兄は寧ろ歌といふ觀念を暫く放棄しておいて、他の藝術品に接して御らんなさい、西洋のものなどもたいへん飜譯差列ゝありますから、それらに接する便も甚だ多くなりました、（中略）とにかく眞摯な、生れ代つたやうな新しい心持になる必要があります、理屈をいふより、先づ右の讀書法が一番いゝと信じます、歌といふもの、文學といふものを單に活字の上のものと思ひ込んだやうな境地から一日も早く逃がるることです　　（大正２年５月４日　印田恵助宛書簡）

君の歌、近來どうもあまり乾きすぎてる樣に見受けますが、どうでせう、つまり、底が淺いといふのでせう（中略）何か、西洋の大きな小説でも讀んでみたらどうです、やはり自身の生活（生命）に深みうるほひがないとどう苦勞してもいゝ歌は生れぬとおもひます

（大正 15 年２月 18 日　高塩鹽背山宛書簡）

おわりに

これまで見てきたように、牧水は幼少期より実に多種多様な本を読んでいたことが分かる。それは彼の育った環境によるものがあり、短歌を志すようになったのも教師に勧められた本が契機である。また読書によって田山花袋や国木田独歩から少なからず自然主義の

影響も受けつつも、「よき歌はよき生命より生れる、或はよき生命よりのみ生れる」という観点から、自分の生命のための読書の必要性を説き、自身もそれを実行していたことが窺える。そしてそのことが彼の歌にも多少なりとも反映していたのではないだろうか。今後機会があれば読書と彼の歌との関係についても調べてみたいと思っている。

注

(1) 『姉の讀む物語から』(大正 6 年　全集第 5 巻　単行本未収録文)、『比叡と熊野』(大正 8 年 9 月春陽堂刊　全集第 6 巻)、「序」(尾山篤二郎著『大正一萬歌集』大正 3 年　全集第 9 巻)、

(2)「武蔵野」(「交友會雑誌」延岡中学校　明治 39 年 3 月 全集第 2 巻　初期文集)

(3) 『伊勢物語』12 段「盗人」

(4)「本書の初めに (『わが愛誦歌』)」(大正 6 年 自著序文　全集第 5 巻　単行本未収録文)

(5) 『姉の讀む物語から』(大正 6 年　全集第 5 巻　単行本未収録文)

(6) 『古い村』明治 42 年 6 月 全集第 2 巻　単行本未収録文)

(7)『彼の一巻、この一巻』(明治 43 年 全集第 3 巻　単行本未収録文)

(8) 「中学文壇」明治 35 年 3 月　全集第 2 巻　初期文集)

(9) 「青年議会」明治 36 年 11 月　全集第 2 巻　初期文集)

(10)『姉の讀む物語から』(大正 6 年　全集第 5 巻　単行本未収録文)

(11)「早稲田より」(「交友会雑誌」明治 38 年 3 月　全集第 2 巻　初期文集)

(12) 「歌話と批評と添削」(『和歌講話』大正 6 年　全集第 6 巻)

(13)『彼の一巻、この一巻』(明治４３年全集第 3 巻　単行本未収録文)

(14) 「本書の初めに (『わが愛誦歌』)」(大正 6 年 自著序文　全集第 5 巻　単行本未収録文)

(15)『牧水研究』第 9 号　牧水研究会企画・編集　鉱脈社　2011.1

(16)「『姉の讀む物語から』(大正 6 年　全集第 5 巻　単行本未収録文)

(17)「日本短歌」(昭和 15 年 9 月号) 全集第 2 巻 資料編 2

(18)「抒情」(昭和 24 年 1 月号) 全集第 1 巻 資料編 1

(19)『短歌現代』第 26 巻 10 号　短歌新聞社　2002.10.

(20) 『ツァラトゥストラ』については、吉川宏志氏の「若山牧水の「身体」論」(『牧水研究』第 8 号　牧水研究会企画・編集　鉱脈社　2010.7) に、ベルクソン」については同氏の「ベルクソンを読む若山牧水」(『牧水研究』第 7 号　牧水研究会企画・編集　鉱脈社 2009.12) で触れられている。

『毒の園』は明治 45 年 6 月新潮社発行の『毒の園：露国新作家集』昇曙夢訳の中にある「毒の園」(ソログーブ) であろう

『サフオ』はアルフオンス・ドオデエ著　武林無想庵訳　新潮社　大正 2 年　近代名著文庫第 2 編であろう

『遊蕩兒』はオスカア・ワイルド作　本間久雄訳　新潮社　大正 2 年 4 月であろう

『鴨』はヘンリック・イブセン作　村上静人編　赤木正蔵　大正 3 年 9 月であろう

(21) 「たべものの木」(全集第 13 巻 単行本未収録文(大正 14 年～昭和 3 年))

引用および参考文献

『若山牧水全集』増進会出版社　1992.10―1993.12

『わたしへの旅―牧水・こころ・かたち―』大岡信、佐々木幸綱、若山旅人他編
増進会出版社　1994.5

『若山牧水』（人と作品 44）福田清人編　小野勝美著　清水書院　1985.2

『牧水の心を旅する』伊藤一彦著　角川学芸出版　2008.10

『若山牧水：流浪する魂の歌』（中公文庫）大岡信著　中央公論社　1981.9

『牧水の生涯』塩月儀市著　牧水生誕百年祭記念実行委員会編　鉱脈社　1985.8

（よしおか・よしのぶ　別府大学附属図書館）